

伝承地：塙田1-3-10 (本願寺)

話者：4



(白蛇の化石)

正中2年(1325)、礼智阿上人によって開山された本願寺は、滋賀県の番場蓮華寺の末寺で、関東時宗の一派に所属していた。

この白蛇の伝説は、本願寺にかかわる百目鬼の伝説よりも古く、本願寺縁起として伝えられている。

白蛇はその姿をみられることをひどく嫌っていたので、化石となった白蛇もあまり人目にふれることなく伝えられている。

今からおよそ700年くらい前の鎌倉時代のころのことです。塙田村の庄屋の息子が、隣り村へ行く途中、山道で子ども達にいじめられている白蛇の子を見て、助けてあげました。その帰り道、同じ場所で今度は女の子が泣いています。聞けば親にはぐれてしまったとのこと。庄屋の息子は家に連れて帰り、自分の両親に頼んで一緒に暮らすことにしました。

このことがあってからのち、庄屋の息子は山賊に襲われたり激流に落ちたりなどと、災難に遭うたび、いづことなく現れる大蛇に救われるという不思議なことが重なります。これらはみな仏の加護に違いないと思い、両親と相談し、寺を建立し、徳ある上人を呼び寄せました。

成人した庄屋の息子は、今は美しい娘に成長した、かつて山道で助けた女の子と結婚しました。まもなく娘は男の子を産み母となりましたが、毎日寺へ詣っては何かか思い悩んでいる様子。

ある日、夫は娘のあとから寺へ行ってみると、熱心に上人の経や説法を聴いていた娘の姿が、だんだん蛇の姿に変わっていくのを見てしまいました。そして、本当の姿を見られたと気付いた娘は、上人の前で、夫や子どもにすべてを打ちあげました。

「以前、山道であなたに助けてもらった白蛇の子が私なのです。大蛇となりあなたを救ったのも私です。おのれの罪の深さは承知しておりますが、できるなら人間の姿でいたいと、毎日お願いしていたのです。」

話を終え別れを告げると、娘は蛇の姿へと戻って行きましたが、悲しみの余り、その場で化石と化したのでした。

その後、庄屋の息子と男の子は、ともに出家し妻でもあり、母でもあったその化石を、永く守り、供養し続けたということです。

